様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １４ 日現在

機関番号：６２６０８
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４７２０１１９

研究課題名（和文）福地桜痴を中心とした幕末明治の文芸に関する総合的研究

研究課題名（英文）General study on literary arts of the late Tokugawa period and Meiji led by Ouchi Fukuchi

研究代表者
丹羽　みさと（NIWA, Misato）

国文学研究資料館・研究部・特定研究員

研究者番号：９０５８１４３９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、桜痴の文芸教養の背景及び周辺の知的ネットワークに注目することで、彼の文芸活動の全体像を明らかにすることを試みた。
福地桜痴の教養形成については、父苟庵の文学論の影響とそれへの反撥が、桜痴の文学論の土台となっていることを明らかにした。また、上京後の交友関係と「文学」論の関係の再検討し、戯作者との交友や洋行体験が苟庵の文学論から離脱の推進力となったことを示した。更に、桜痴の「翻案物」の受容について考察を行い、桜痴の存在が近代文学者にとってどのような意味を持ったのかを検討した。

研究成果の概要（英文）：This study is a trial to clarify perspective of the literary arts activity of Ouchi Fukuchi. I considered them based on the intellectual network and his educational background.
The culture of Ouchi Fukuchi has a big part formed by education of his father. I made clear that influence of his father and the repulsion for it were seen in his literary criticism. Furthermore, I reexamined relations with his friend (after he lived in Edo) and literary criticism. I thereby showed that the association with the novelist of the late Tokugawa period was a chance to be separated from the literary criticism that father proposed. In addition, I investigated the overseas experience and adaption of Ouchi Fukuchi. The activity of him brought a modern literary person new culture, but produced the repulsion at the same time.

研究分野：日本近世文学、日本近代文学

キーワード：福地桜痴　福地苟庵　知的ネットワーク　長崎の文化　幕末明治の文芸

１．研究開始当初の背景

幕末明治期には、新聞メディアが生まれ、外国文学への知見が育まれた。また、政治に近接した演劇など、近世とは異質な文芸が興起した。これら近代文芸の原点をなすものに福地桜痴は広く関与している。

近年、幕末明治期の戯作に関する研究は大きな進展を示している。たとえば、同時代において圧倒的な知名度を誇りながらも、近代主義的な文学観からは軽視されがちであった仮名垣魯文については、谷川惠一氏等の精力的な研究があり（『原典資料の調査を基礎とした仮名垣魯文の著述活動に関する総合的研究』2008）、また魯文以上に看過されてきた同時代の山々亭有人についても土谷桃子氏の著書（『江戸と明治を生きた戯作者山々亭有人』2009）が刊行され、研究が進められている。また当時の文芸において高い地位を占めていた漢詩文についても、宮崎修多氏（「漢訳文と明治の記事文」（『明治文学の雅と俗』2001）や合山林太郎氏（「漢詩改良論―詩歌の近代化と漢詩」『国語と国文学』2007.3）の研究によって、新たな知見がもたらされている。更に『新日本古典文学大系』明治編の刊行によって、明治初期の文学に対する一般の読者の見方も変わりつつある。

このような研究上の活況にも関わらず、福地桜痴についての研究は意外にも少ない。福地桜痴は、幕末に通弁として幕府に仕え、以降、遣欧使節団などの一員として三度洋行し、維新以後は『東京日日新聞』の主筆として活躍した。彼は文芸にも造詣が深く、自ら戯曲や小説の筆を執ることもあったが、その文芸活動に焦点を当てた研究は柳田泉（『福地桜痴』1966）・蛯原八郎（「明治十年前に於ける桜痴居士の文学論」『書物展望』1933.7）・越智治雄（「福地桜痴試論」『文学』1966.4）など、政治論研究に比すると僅かである。近年では他の文筆家との関連から言及されることがあるものの、桜痴の文芸活動については研究史上の大きな空白となっている。

本研究はこの空白を埋め、文明開化期の文芸における福地桜痴の働きを解明し、近代文芸の成立過程を分析するものである。

２．研究の目的

幕末明治期の新聞メディアや翻訳文学、演劇改良運動など、近代文芸の原点をなすものに福地桜痴は広く関与している。

近年では他の文筆家との関連から言及されることがあるものの、桜痴の政治論研究に比べると、文芸活動については研究史上の大きな空白となっている。新聞メディアと戯作者、政治と演劇など、文明開化期の文芸を考える上で桜痴は避けて通ることのできない人物である。そこで本研究では、福地桜痴の文芸活動について、多面的な関与を可能にした彼の教養形成や、周囲を取り巻く人々のネットワークに注意を払いながら全体像を明らかにし、文学・演劇・政治など様々な分野の変遷について総合的な研究を行い、近代文芸研究の根源解明に寄与することを目的とする。

３．研究の方法

本研究は、福地桜痴の自筆稿本や序文、著作などの目録作成という基礎研究に加え、桜痴の文芸教養の背景、及び周辺の知的ネットワークに注目することで、彼の文芸活動の全体像を明らかにすることを試みた。

以下の三つの角度から研究を行った。

（１）福地桜痴の教養形成についての検討

桜痴の父、苟庵はシーボルトや高島秋帆などと親交があり、また桜痴が江戸へ行く際には、安積艮齋や岩瀬忠震、箕作阮甫などへの紹介状を持たせていたことから、苟庵の交友関係が桜痴へも大きな影響を与えていたと思われる。そこで、桜痴の教養形成を確認するために、長崎県立図書館や長崎県立博物館

などの調査を行った。これによって江戸後期の長崎の文化状況を解明し、桜痴の学問や文芸の根底と、その方向性とを理解できると予想した。

また、刊行物を網羅的に調査した。桜痴自身の著作を調査するのは当然であるが、彼が他の文筆家の著作に寄せた序文類についても調査を行った。桜痴は親交のある文人から序文執筆の依頼を受けることが多く、序文類は彼の交遊圏を明らかにする上で重要な資料である。通常の著作目録では、このような序文類を載録することは稀であり、この点は桜痴をとりまく知的ネットワークに着目した本研究の特徴であるといえる。

（２）福地桜痴の教養形成についての検討

桜痴は江戸へ上京した後、戯作者や歌舞伎関係者また豪商の細木香以などとも親交を持っていたことが、馬十連の回顧録『恩』などに記されている。花柳文化圏での桜痴の遊興はつとに有名であることから、そこでの交流も視野に含めながら桜痴の交友関係を探り、文芸への影響について検討した。具体的には『恩』紙上に記載されている人物、大槻如伝や滝和亭などの著作から桜痴との交流、影響関係の実証的な証明に努めた。また、桜痴は文久元(1861)年、慶応元(1865)年、明治3(1870)年と、三度の渡航経験を持つが、成島柳北や伊藤博文など、メディアや政治の世界で活躍した人々と同行している。桜痴と同時に出立した人々の日記や記録などを検討することにより、これまでの桜痴研究においてもっとも空白となっていた部分、即ち桜痴の渡欧の具体的様相の解明を試みた。

（３）「翻案物」の調査と分析

桜痴が関与した自他の著作には、海外の戯曲・小説を種本にしたものが多い。たとえば、『あはれ浮世』は『レミゼラブル』の翻案であり、『幕府衰亡論』はギボン『ローマ衰亡論』を発想の源としている。ここで、重要な点は彼が周辺の文人たちの要望に応じる形で、海外の文芸作品の情報を提供していたことである。「翻案物」の分析により、桜痴の文芸観と周辺の文人たちの文芸観との微妙な交錯について検討を行った。

４．研究成果

上記の三つの角度からの研究に関して以下のような成果を得た。

（１）福地桜痴の教養形成に与えた父苟庵の影響の解明

近代文学館に所蔵されている福地苟庵の書館を調査・検討した。長崎に住む桜痴の父福地苟庵から送られた書簡には、仕官への助言やコネクションの示唆、雇用への強い期待、また桜痴の着道楽や散財への忠告などが記されている。これらを通し、桜痴が政界との関係を維持し続けた理由や、文芸界・歌舞伎界との交流のきっかけなどを考察した。この成果は「長崎人、福地桜痴の上京――苟庵の書簡から――」（『立教大学日本文学』第 109 号　立教大学日本文学会、2013 年 1 月）として公刊されている。

また上記論文の執筆過程で得た知見に基づき、明治 14 年から『東京日日新聞』紙上で展開された桜痴の「文学」論について検討を行った。戯作が「達意」の最も有用な文学であるという主張の背景に、父苟庵の「文学」論の影響とそれへの反撥があることを明らかにした。これについては「福地桜痴の交友と業績」（立教大学　立教大学日本学第五十二回研究例会、2015 年 1 月）という題目で報告を行った。

（２）上京後の交友関係と「文学」論の関係の再検討

前述の報告（「福地桜痴の交友と業績」）では、父苟庵の影響と、上京後の戯作者との交

友が桜痴の文学論に与えた影響について言及したが、さらなる調査の上、詳細な検討を加えた。これによって、父荷庵の戯作無用論からの離脱が、戯作者たちとの交流で得た知見と渡欧経験によって推進されたことが分かった。これについては、既に「福地桜痴の「文学」観成立の背景――父の教えと交友関係――」という論考を執筆しており、7月に公刊予定である。

（3）桜痴の「翻案物」の受容に対する分析

桜痴の「翻案物」は、同時代及び後世の読者に鮮明な印象を残している。そこで、受容の側面から桜痴の「翻案物」を検討した。

『銭形平次』が代表作である野村胡堂は、桜痴が翻訳した『昆太利物語』に感動し、小説へ強い興味を抱くようになった。彼が後年、江戸川乱歩とやり取りした書簡には、明治期の「翻案物」に対する胡堂・乱歩の評価や関心の所在を見ることができる。これについては、「江戸川乱歩・野村胡堂往復書簡――黒岩涙香本をめぐって――」(『大衆文化』第10号　立教大学江戸川乱歩記念大衆文化センター、2014年3月）として発表している。

また、「翻案物」受容の問題を起点として、後代の劇作家の桜痴評価の問題を検討した。中でも山崎紫紅は、桜痴の戯曲に対して辛辣な意見を述べている。彼が大正2年に発表した「涙橋」は、シェークスピアから示唆を得ながら、繊細な心情描写を展開しており、そこには桜痴の「翻案物」とは異なる外来文学摂取の方向性を窺うことができる。

（4）得られた成果の国内外における位置づけとインパクト

福地桜痴に関しては、これまで注目はされていながらも充実した研究がなされてこなかった。桜痴は父の荷庵に対する敬慕の念をしばしば語っているにもかかわらず、荷庵についての検討がなされていなかったのは、研究上の大きな欠落であったといえる。本研究では、荷庵の著作・書簡を緻密に分析し、父荷庵の存在を背景に置くことで、桜痴の文事の全体像が把握しやすくなることを明らかにした。これは、今後の桜痴研究において重要な立脚点になると思われる。

また、桜痴に対する評価を軸にすることで以後の時代の文学史の流れに対して、見通しが立てやすくなることを明らかにしたのも本研究の成果である。明治文学・文化研究に限らず、本研究が示した知見は、近現代文学研究にとって示唆に富んでいると考える。

（5）今後の展望

桜痴の著作目録については、編纂作業を今後も継続し、発表したいと考えている。

桜痴及びその交友圏が後代に与えた影響については、その一部分は明らかにしたが、岡本綺堂との関連などについてはまだ十全な分析を行っていない。本研究の成果に基づき、桜痴作品の後代の受容の問題だけでなく、桜痴を一つの柱として形成された交友圏の文化活動が、どのように変容し、次の世代の文学者に影響を及ぼしたのかについて、多面的に検討していきたいと考えている。

5．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　3件）

①<u>丹羽みさと</u>「福地桜痴の「文学」観成立の背景――父の教えと交友関係――」『立教大学日本学研究年報』第13巻、2015年7月（予定）、単著、査読無し

②<u>丹羽みさと</u>「江戸川乱歩・野村胡堂往復書簡――黒岩涙香本をめぐって――」『大衆文化』第10号、2014年3月、pp.60～87、単著、査読あり

③丹羽みさと「長崎人、福地桜痴の上京――荷庵の書簡から――」『立教大学日本文学』第 109 号、2013 年 1 月、pp.131～142、単著、査読あり

〔学会発表〕（計　２件）
①丹羽みさと「福地桜痴の交友と業績」立教大学日本学第五十二回研究例会、2015 年 1 月 31 日、立教大学（東京都豊島区）

②丹羽みさと「山崎紫紅の八百屋お七―成立と趣向について―」日本演劇学会秋の研究集会、平成 26 年 11 月 16 日、京都外国語大学（京都府京都市）

６．研究組織
（１）研究代表者
丹羽　みさと（NIWA, Misato）
国文学研究資料館・研究部・特定研究員
研究者番号：９０５８１４３９

（２）研究協力者
細谷　朋子（HOSOYA,Tomoko）
十文字大学・人間生活学部文芸文化学科・助手

神林　尚子（KANBAYASHI,Naoko）
東京大学・大学院生